

山内さんを偲ぶ

小柴禧悦(化工会)

4月3日の傘寿記念同期会の前日に山内さんから「腹痛のため病院へ行ったところ安静を命じられたので、ドタキャンで申し訳ないけれど、皆さんによろしく」という電話を貰い残念ながらやむを得ないことと幹事の皆さんにその旨メールした。そして同期会の翌日4日に同期会の結果報告を兼ねて様子を伺おうと電話したところ、いつもと違う切迫した口調で入院することになったと言うことでそれ以上聞くこともできず、お大事にとまって電話を切った。5月19日に大橋さんから電話で知らせを受け、突然のことに驚愕し、しばらくの間呆然としてしまったが、結局その電話が最後になってしまった。20日に奥様から訃報の葉書を戴く。今はただご冥福をお祈りするばかりであるが、始めて1年になる短歌にて偲ぶ。

卒論の装置並べて実験せし長き付き合いの友にわかになく

居るだけで楽しい気分醸し出す十日違いの友今は亡し

彼(お互いに苗字で呼び捨てしていた間柄でどう呼んだら良いか悩むところ)とは色々な場面で思い出がある

るので、何を書いたら良いか考えた末に、ゴルフにまつわる事を書いてみることにする。

まずは現役時代に同期の寮仲間が始めたという燦燦会に参加してゴルフ交流が始まった。そこで彼は持ち回り優勝杯と別に仕事柄専門のクリスタルガラス杯を手配してくれていた。因らずも第23回大会で優勝し同杯を手



にし今も飾り棚に鎮座している。これにヒントを得て社内のゴルフコンペの小柴杯をクリスタルに決め彼にお願いして何度か手配して貰ったことがあった。

大山研の同期は卒業後、大山先生、伊藤先生のお宅に新年のご挨拶に伺っていた、そこで2年後の35年

卒のグループと良くかち合うことがあり、お互いにウマが合ったのが切っ掛けで、研究室の同窓会などで交流があったが、皆毎日が日曜日になった後 2003年から燦燦珊瑚会と称して春、秋の年2回千葉カントリー川間コースでコンペを行い、現在も続けている。

33年組は大島、大橋、小柴、森、山内の5名がメンバーであった。不思議と天候に恵まれる会でプレーを楽しみ、その後の雑談に花を咲かせていたが、その中心にいたのはやはり彼だった。しかし森さんが腰痛のため出場せずに幹事役を勤めるようになり、やがて彼も 2010年の秋の会を最後に出場を控えるようになった(写真はその時)。しかし、テニスは続けているようであり、編集委員会などでは元気な姿を見せてくれていたので、いつかゴルフにも復帰してくれることを願っていた。

私の知っているテニスの愛好家たちはボールを打つことにかけては同じことなのかゴルフも上手な人が多いが、どちらかというゴルフは付き合いで、本当に好きなのはテニスであると感じられる節がある。彼もその一人で学生時代から生涯にわたりテニス愛好家であった。今は天国で思う存分ラケットを振っていることでしょう。合掌。(2016.6.29)